

キテ約束ノ如ク問答ス、此狀ヲ急ギアハテサハギ、ハダシニテ出テ取テ頂戴シテヨミケリ、娑婆世界ハ衆苦充滿ノ國也、ハヤク厭離シテ念佛修善勤行シテ、我國ニ來ルベシ、我聖衆ト共ニ來迎ズベシトヨミツ、サメホロトナキ、スルコト毎年ヲコタラズ、

〔名物六帖〕人事四啼、性行笑啼、梨泣、與梨泣、相

〔源氏物語〕冷標四心のあくがる、までなんなほかくてはえすぐすまじきを思ひたち給ね、さりともしろめたきことはよもとかいたまへり、入道例のよろこびなきしてゐたり、いけるかひもつくりいでたることはりなりとみゆ、

〔大鏡〕花山こき殿の女御の御ふみの、日ごろやりのこして、御身山花もはなたず御覽じけるを、お

ぼしめしいで、しばしととりいらせ給ひけるほどぞかしあはた殿藤原いかにかくはおぼしめしたちぬるぞ、たゞ今すぎなば、をのづからさはりとて、いでまうできなんと、そらなきし給ひける、

〔俚言集覽〕閉べそを作る 泣面を云、ベソはベシ也、

〔古事記〕上速須佐之男命、不知所命之國而、八拳須至、于心前啼、伊佐知伎也、自伊下四字、以音下教此其泣狀者、青山如枯山泣、枯河海者悉泣乾、

〔日本書紀〕神代一書曰、略中次生素戔鳴尊、此神性惡常好哭、ナケフツク悲、

〔日本書紀〕神代一是時素戔鳴尊、自天而降、到於出雲國簸之川上、時聞川上有啼哭之聲、故尋聲覓往者、有一老公與老婆、中間置一少女撫而哭之、

〔日本書紀〕雄略十四十四年四月、天皇欲自見命、臣連裝如饗之時、引見殿前、皇后仰天歎歎、啼泣傷哀、天皇問曰、何由何由二字、原泣耶、皇后避床而對曰、此玉縵者、昔妾兄大草香皇子奉穴穗天皇、安勅進

妾於陛下、時爲妾所獻之物也、故致疑於根使主、不覺涕垂哀泣矣、イサチラル